

忙(ま) し(し) す(す) ぎ(ぎ) る(る)
文官令嬢ですが
無能殿下に気に入られて
仕事だけが増えます

1

OFFの
マーリカ



フリードリヒ

(フリードリヒ・アウグスタ・フォン・オトマルク)

オトマルク王国の第二王子。
文官組織を管轄し、
功績も上げるが怠惰で現場を振り回す。
通称“無能殿下”。

マーリカ

(マーリカ・エリーザベト・ヘンリエッテ・ルドヴィカ・
レオポルディーネ・フォン・エスター＝テッヘン)

王国成立前から続く由緒ある伯爵家の三女。
王宮に出仕を認められ上級官吏として
激務の部署に勤めていたが、
ある事件をきっかけに第二王子付
筆頭秘書官に抜擢される。

登場人物紹介



クリスティーネ

(クリスティーネ・フォン・メクレンブルク)

五大公爵家筆頭
メクレンブルク家の長女。
フリードリヒの友人で
婚約者候補。

アンハルト

(アンハルト・フォン・クリスティアン)

侯爵家嫡男の武官。
フリードリヒ付近衛騎士
班長。

ヴィルヘルム

(ヴィルヘルム・アグネス・フォン・オトマルク)

王太子。
武官組織を管轄している。

シャルロット

(シャルロット・フランツ・フォン・オトマルク)

第一王女。
五人兄妹の末っ子。

アルブレヒト

(アルブレヒト・カロリーネ・フォン・オトマルク)

第三王子。
フリードリヒの補佐についている。

忙しすぎる
文官令嬢ですが
無能殿下に気に入られて
仕事だけが増えています

1

Contents

一◆文官令嬢、不敬罪で無能殿下に気に入られる	006
二◆忙しすぎるので一年が早い、つらい	036
三◆手紙が届いた、差出人の名前はない	062
四◆人の噂はあてにならない	082
五◆その夜、なんとなく	097
六◆公爵令嬢は画策する	115
七◆ここにいない彼女を思う	126
八◆しばしの間だとはいえ	147
九◆或る親と子の対話	165
十◆普段へらへらしている者ほど怒らせると怖い	176
十一◆無能殿下が妙なところで本気をだしてきて困る	199
十二◆首尾はどうなのと言われても	209
十三◆人の気も知らないで	217
十四◆今度こそわたしの文官人生終わりなのでは	230
十五◆年越しの夜会で	242
十六◆長く適任が見つからずにいた仕事はある	253
十七◆そして仕事が増えていく	275
閑話◆主従二人と側周り達の雑談と	297

一 文官令嬢、不敬罪で無能殿下に気に入られる

終わった――。

わたしの文官人生、終わった……。

近衛騎士に指示された猫足の華奢な椅子に座って項垂れ、マリーカは虚ろに呟いた。
結び上げている黒髪が一筋こぼれて目の端にかかっても、耳にかけて直す気も起きない。

長いまつ毛を伏せて彼女は、髪と同じ黒い瞳の眼差しをわずかに細める。髪だけでなく、縁飾りの刺繍が施された上着の襟も乱れているとは思ったがやはり直す気が起きない。

通された小部屋は、マリーカが想像していたような恐ろしい尋問部屋ではなかった。

小花柄の壁紙やカーテンが可愛らしい、貴族女性がちよつと装いを直したり、あるいはお供の侍女達が待機する場所として使われるような部屋である。窓から差し込む黄昏時の光に照らされて、壁も、白い窓枠も、淡く黄色に染まっている。

（お金も権力もない、ただ古くから続く弱小伯爵家の三女でも、このように氣遣っていただけとは）

胸の内で呟きながら、この部屋へ連行される半時間前のことをマリーカは回想する。王家の権威を示す如く、その紋章を最も目立つ柱に掲げる王族の執務室での出来事を。

二人の近衛騎士に床に押さえつけられて膝をつき、マリーカは我に返った。肩で息をしながら、騎士達に両側から腕を取られて引き離された人物を彼女は見詰める。

彼女の目の前には、壁を背に、床に尻餅をついた美貌の第二王子の姿。

緩く波打つ淡い金髪が美しい彼は、少々赤く腫れぼったくなった両頬を手で挟むようにさすりながら、信じられないといった驚きに空色の目を見開いてマリーカを凝視していた。

二十歳になったばかりであるマリーカの五つ年上なはずだが、その仕草と呆然とした表情のためか、彼は妙に可愛らしく見えた。まるで叱られた幼子^{おきなご}。彼が身勝手な言動で現場の文官武官を振り回すことへの怒りと、それを誰も止める者がいないことへの憤り^{いきどお}は行き場を失い、後はただ、大変なことをしてしまったという事実だけが残った。

「マリーカ・エリーザベト・フォン・エスター＝テツヘン嬢」

低く固い声に名前を呼ばれ、回想から現在へとマリーカは引き戻される。

「……はい」

一拍の間を置いて返事をし、彼女が俯^{うつむ}けていた頭をのろりと持ち上げれば、視界に短く整えた赤髪の近衛騎士の姿が入る。濃い茶色の瞳、年の頃は三十前後の、マリーカが腰掛けているのと同じ華奢な椅子に座るには体格の良過ぎる美丈夫^{びじょうふ}。

隊長然とした雰囲気で、その容姿の色に合わせたような、焦茶色の縁取りに金糸の装飾を施す、

臙脂色えんじの近衛騎士の制服がこれ程似合う人もない。

間に小さなテールを挟み、真正面からマーリカを見るその眼差しは、彼女を氣遣うようでもあり、些細ささいなことも見逃さないとといったようでもある。

おそらく彼が、これから取り調べを行う人なのだろうとマーリカは思った。

（疲労し過ぎて若干正気を失っていたとはいえ。あの無能——第二王子の胸ぐらを掴んで、平手打ちを往復で数回）

本当にどうかしていた。望み叶って王宮勤めの官吏になれたのにどうしてこんなことにと考えては、両手で顔を覆いたくなるのをかろうじて堪こたえる。公おみやぎの場で動揺や心の内を見せないようにといった、十五歳までの淑女教育がまさかこんな場面で役立つとは。

マーリカが赤髪の騎士を真っ直ぐに見れば、彼の肩越しに彼より幾分か若い茶髪の騎士の姿も見えた。少し離れた場所の書物机に向かい、調書のための紙とペンを用意している。

部屋に、近衛騎士は三人。もう一人は、マーリカの右斜め後ろに護衛のように立っている。おそらく不審な動きをしないか見張っているのだろうと彼女は思った。

マーリカは、いま、王族に危害を加えた現行犯としてこの部屋にいる。それにしても丁重な扱いなのだけれど。

少なくとも、普段の、文官組織での扱いよりはずっといい。

「貴女あなたのようなご令嬢を、このような狭い部屋で大の男が取り囲むものではないのですが、事が事であるがゆえ」

小部屋といつても、マーリカが所属する部署の殺風景な部屋より広いし、いま座っている椅子一つとつてみても、耐久性重視なものではなく、王宮の客間や夜会の場に用意されるような優美な絹張りの椅子だ。なによりマーリカに対する敬意を感じる。

王家直属、王族の警護が主な任務である近衛騎士は、罪人に対してまで礼儀を失することはないのだなと感心すると同時に、悪人に舐められるのではと余計な心配もしてしまふ。

「取り返しのつかないことをしたと自覚しております。罪に身分は関係ないかと。どうぞわたくしが王家に仕える臣下、伯爵家の人間だからなどと思わず尋問くださいませ」

だからマーリカは本心からそう申し出た。彼等の態度に呼応するように、彼女としては久しく使っていないかった令嬢の言葉遣いが口から滑り出る。

マーリカは王宮勤めをするにあたり、女だからと侮られぬよう男装で、話す言葉も男性の言葉を遣っている。効果の程は残念ながらいまひとつだけれど、動きやすさや働きやすさの面でも利点があるからそうしている。

王宮に勤めるようになってそろそろ二年が経つけれど、もしかすると当たり前の敬意でもって立場相応に扱われたのは、いまこの時が初めてかもしれない。

（文官組織の人達の、女如きが出しゃばるなって本音の見え隠れする態度とは全然違う）

「私を取り押さえた上級官吏の数は、両手の指をゆうに超える。皆、こうだと楽なのだが」

「はい……？」

「上級官吏は国の要職に就く資格を持つ。まして王家の直の臣下として仕えるのは普通は当主かそ

の嫡男。ちやくなん 王家に忠誠を誓い、己の家より優先して時に命を賭して王族と国を支える者であるがゆ

えの特権もある。ご令嬢でもかような立場なことは自覚された方がいい」

王家に仕えし臣下と認められるのは家格や実績ある高位貴族だけだ。弱小でも古くから続く伯爵家はかろうじてその中に入っていた。

当主である父親の推薦状や論文など書類を揃えて手続きし、まるで口頭試問のような謁見を終えて国王陛下に臣下として認められ、マリーカは上級官吏に任命された。

それがどれほど異例中の異例であり、その重みを理解しているのかということだろう。

王宮の官吏、特に文官組織はほぼ男性で占められる。平民登用の下級事務官や雑務従事者はともかく、マリーカのような貴族女性の上級官吏はいない。身分が問われ、箔付けにもなる、女官や女性王族の側仕えそばづかなどは別として、そもそも貴族女性が働く考えが一般的ではない。

それなのに臣下と認め、任命して下さった国王陛下にこれでは顔向けできない。

「申し訳ありません！」

赤髪の騎士の言葉が胸に刺さり、たまらずマリーカはテーブルに額を擦り付ける勢いで頭を下げた。驚いたのかガタツと彼が膝を打つ音がしてテーブルが揺れる。

「わたくしが軽率でした。あのような非礼極まりない振る舞い、許されないことです！」

「違つ、何故そうなる……たとえ現行犯でも慎重な対応をするといった……いえ、どうぞ貴女はそのままです。あーいや、顔は上げて。話ができない」

そのまま平伏していると云ったわけではないようだ。マリーカが顔を上げれば、赤髪の騎士は何

故かほつとしたような表情を見せ、軽く後ろを振り返り、書物机に向かいペンを持って待機している若い騎士に頷いた。

「フリードリヒ殿下のことは、私も知らぬわけではない。貴女のような人があの無能——ゴホン、失礼。殿下にこれ以上なにかといった心配はないでしょう。今日はもう遅い。一通りの事実確認だけで」

ちらりとマリーカは窓へ視線を送る。季節は秋へと移り、いつまでも薄明るい夏の夕べから日の入りも早くはなっている。部屋も入った時より薄暗くなりつつあるが、しかし。

「遅い？」

マリーカは上着の内ポケットから、繊細な紋様が彫られた小さな銀時計を取り出す。

出仕が決まった際、父親から譲られた時計だ。その針が示す時間を確認し、彼女はわずかに眉を顰めた。

「まだ定刻から一時間ほどしか経っていませんが？」

事実確認だけとはいくらなんでも手ぬるくはないだろうか。

「わたしの身分や立場がどうであれ、尋問の手を緩める理由にはなりません」

完全に令嬢から文官に戻った口調でマリーカが毅然とした態度で言えば、取調官であるはずの彼は今度は憐れむような色を浮かべた眼差しで彼女を見て、緩く左右に首を振る。

「あの、それから」

その手で取り押さえた罪人であるはずのマリーカに対し、なんだか同情的な態度を見せる赤髪の

騎士を少々訝^{いぶか}しみつつ、ふと調書について思い至ったマーリカはついとばかりに言葉を続ける。

「なにか？」

「先程、仰いましたわたくしの名前は規定に則^{のっと}った省略名です。調書には正確な名前を記すのがよろしいかと思ひまして。マーリカ・エリーザベト・ヘンリエッテ・ルドヴィカ・レオポルディーネ・フォン・エスター＝テッヘン。長い名前ですが、枝分かれた複数の親族から名を取る慣わしで。紙とペンをお借りできれば、綴^{つづ}りを書きますが」

もはや職業病といえる几帳面さで一息に伝えたマーリカに、赤髪の騎士はため息を吐く。

「いえ、結構。それには及ばない。貴女の情報は照会済みです」

「……それもそうですね。差し出がましいことを申しました」

「貴女は、その——」

不意に部屋の扉がノックされ、赤髪の騎士は会話を中断し、「入れ」と許可の声を上げる。

室内にまた一人、近衛騎士が増える。使いの者らしく、足早に赤髪の騎士に近づき耳打ちした。なにやらぼそぼそと話す彼等のやりとりが、マーリカの耳に断片的に届く。

なっ、たしかか。はい。そんなことがあつていいのか……。

(どうしたのだろう)

馬鹿な、人事院はなにを考えて……。ですが、そうとしか。陛下が……。

「あの、なにか大変なことでも？」

陛下と聞こえて、自分の尋問などしている場合ではないのではとマーリカは声をかける。尋問は

後日に、牢にお連れくださってもマリーカが提案すれば、今度は何故か二人からものすごく気の毒そうな目で見られた。

「……貴女が心配するようなことはない。ええ、なにも！」

ふと、後方からも視線を感じて、マリーカが護衛のように控え立つ近衛騎士を軽く仰ぎ見れば、彼もなにか複雑そうな面持ちでマリーカを見下ろしている。

正面に向き直れば、書物机の騎士もなにか察したような様子でこちらを見ている。

マリーカは彼等の様子に内心首を傾げ、ふと顔にかかる髪に気がついた。

（そういえば……連日の激務であまり身の回りを構っていなかった。暴れて取り押さえられて、貴族としてあるまじき姿になっているだろうし……）

令嬢としてはそれだけでも十分ありえないことだ。おまけに二十五連勤の激務の疲労で肌荒れして、目の周りには隈が浮かんでいるはずである。瞳の色が黒いから一層暗く見えるかもしれない。加えて、引つ詰めていた黒髪も、衣服も、マリーカを制止しようとした近衛騎士に抗ったために乱れてよれよれの姿になっている。

（彼等が普段接するような伯爵令嬢といえば、美しく装い、微笑みながら淑やかに振る舞うような女性だもの）

「そういえば痛むところなどは？　ご令嬢には幾分手荒なことをした」

「平気です。問題ありません」

マリーカの考えを裏付けるような赤髪の騎士の氣遣う言葉に、やはりそういうことかと、テーブル

ルの下、膝の上で重ね合わせた手を軽く握りながら彼女は淡々とした口調で答える。

掌てのひらに嫌な熱を帯びた痛みの余韻が微かに残っているけれど、それは彼等のせいじゃない。

マリーカの返答に赤髪の騎士は頷いて、使いの騎士を「承知した」の一言で下がらせた。

使いの騎士が去った後、部屋扉が完全に閉まるのを待って、赤髪の騎士は取調官らしい様子でテーブルの上で組んだ手に口元を近づけ、頭の位置を低くし、マリーカと目線を合わせる。

「なんと言えればいいか」

「罪を犯した者に遠慮は無用です。はっきり仰ってください」

「あーいや、そういったことではなく……貴女の行為は褒められたものではないが、色々と行き違いもあって起きてしまった事のように」

「行き違い？」

「手早く済ませましょう。いま我々が貴女に与えるべきは裁きや罰ではなく、休息だ」

「は？」

「命大事に」

「はあ、どうも」

かくして彼女は、簡単な事実確認だけで解放された。

とはいえ王宮内で見張り無しとはいかないらしく、官舎まで護送はされたけれど。

（彼等の常識から見て、わたしは激務で疲れ果てた末に錯乱して罪を犯した、哀れな令嬢なのかもしれないけれど。でも、情状酌量にしても流石に……後日、召喚命令がかかるのか？）

官舎へ向かうマリーカに、護衛のように付き従っている若い騎士に尋ねてみたが、はっきりした返答は得られなかった。

それはそうだ。尋ねてぺらぺら喋るようでは職務上問題である。

護送の騎士は、取り調べの時に彼女を見張っていた近衛騎士。褐色の髪を襟足でひと束ねにしていて、若いといってもマリーカより二つ三つ年上に見える。

伯爵令嬢なら王都にも屋敷があるのではと、護送を指示した赤髪の騎士に不審がられたが、理由を説明したらそれ以上追及はされなかった。

エスター・テツヘン家の王都屋敷は、社交期間に領地から王都へ両親が出ることもなく、二人の姉も嫁いで使う者がいない。そのため経済的に恵まれない、芸術家を志す者や中等・高等教育機関の学生に食事付下宿として無償提供している。

マリーカ一人の事情で彼等に退去を迫るわけにはいかず、彼女は官舎の部屋を申請して使っていた。

（ほぼ寝るだけになっているし、王宮の部屋より費用もかからないし）

高貴なる者の義務を果たす姿勢は立派である。しかし望めば王宮に部屋を持てる身分と立場で、平民・下級貴族の独身者向けの官舎は、護身諸々含めどうなのかと。

マリーカの説明を聞いた近衛騎士達が困惑していたことには気付かないまま、彼女は護送の騎士に官舎まで送ってもらった礼を言う。

官舎は、王城の敷地を取り囲む外壁の内側にあり、取り調べを受けた部屋から大した距離ではな

いけれど、彼にいらぬ定刻外勤務をさせてしまっている。

「わたしのために申し訳ありません」

「いえつ、夜警当番ですつ。お氣になさらず。その、なにかお力になれることがあれば、自分でよければいつでも相談に……つ」

唐突な氣遣いにマリーカはきょとんと彼を上目遣いに見る。女性や弱者を守る騎士の精神に溢れる人であるらしい。手提げランプの灯りに照らされた顔が若干紅潮して見える。

（お力にと言われても……この方、取り調べ側では？）

彼は、マリーカを取り押さえた側の騎士だ。

癒着を疑われるようなことはしてはならないと思う。

マリーカは王族に不敬を働いたのである。いまのところ厳しい追及も拘束もないのは、貴族令嬢で陛下が認めた臣下であるため。王家の威信に響かないよう慎重に対応しているようだが、本来なら即幽閉塔の牢に入れられてもおかしくない。

「お心遣い痛み入りますが、あらぬ誤解を受けて貴方^{あなた}の将来が台無しになつては大変です」

「最初は秘書官に異議申し立てし、筆頭秘書官が現在空席で平^{ひら}の秘書官では話にならず、殿下に物申されたわけでしょう？　貴女にはその権限もある。非があるとは……」

取り調べの際、事実確認で話したことを繰り返した彼に、やはり近衛騎士達の認識は甘いとマリーカは眉^{ひそ}を顰める。

「殿下を壁際に追い詰め、平手打ちしている時点で十二分に非はあります」

「つ、それは。たしかに幾分か勇ましいものでしたが、あの方には我々も困惑させられることが多々あり……」

（側について警護する護衛騎士といえどもそうなのか。お気の毒に）

マーリカだって普通に話すつもりだったのだ。けれど、訪ねた時が悪かった。

第二王子は、丁度マーリカが異議申し立てしようとしていた視察に関して、子供が駄々をこねるが如く赤髪の騎士にごねていた。

茶菓子を自分で選びたいとか、下町のどこそこに行けないならやる気が出ないだとか。執務室にマーリカを通しておいて、ちょっと待っててと言って、彼女の目の前で。

机の上には手をつけていなさそうな書類が山積みで、現場が大慌てで右往左往させられている元凶はやはり貴方かと思つた瞬間、二十五連勤の疲労で若干意識がぐらぐらしていたマーリカの理性は吹き飛んだのだった。

「その、失礼ながら、貴女のようにお綺麗で健気なけなげ令嬢がなぜ文官に？ 理不尽なまでに忙しく働き、辛くはないのですか？」

官舎の門の前で、完全に立ち話になっている。

そのことが気になりつつ、問われてマーリカは考えた。

理不尽……たしかに理不尽なことは多い。出仕早々に、実質的な実務担当者はマーリカ一人の部署に配属されたことなどその最たるものだ。

その部署の役目は、王都のあらゆる行事に関する連絡事項を関係各所に伝達し、様々な部署の仕

事が円滑に連携されるよう調整を図ることであつた。

あちらの部局はこのような対応、こちらの部局はこのように。なにその式典が来賓都合で参列者や序列が変更になるためその対応を、などといった具合である。

各所の間で板挟みになり、急な変更に文句や嫌味を言われることも多い。

特にいまの時期——王都の様々な場所で式典や王家主催の夜会も開かれる、豊穰祭の準備期間は関わる部署が多すぎて、なにがなんだかわからないくらい奔走することになる。

対応事項の多さに、いくらマリーカが上級官吏だからって、よくこんな部署の仕事を新任一人に任せようと考えたものだと思う。

しかし、文官組織はどれも人手不足。それに最終の書面上は長官職の認める必要とするものの、上級官吏には単独の判断で多くのことを処理できる裁量がある。

これも適材適所と考えたら、任された以上はやるしかない。

「たしかに仕事は大変で辛いといえは嘘になりますが、国や人のためにできることをしたいと考えて文官を志しそうなったわけですから……人員は欲しいですけど。一人増えるだけでも全然違うといえますか。ええ本当にっ、人員補充さえあればっ」

「はあ……」

ぽかんとした表情で相槌を打った近衛騎士に、いけない、つい拳こぶしなど握って訴えてしまったとマリーカは反省した。文官組織の人員不足は深刻なのである。

「ええと……それに少し面白くもあつて」

「面白い？」

「最初はなにもわからず途方に暮れましたが、必死にやれば片付いて形になるものだ」と

式典やお祭りの大掛かりな飾り付けも、大勢の出入が混乱しないのも、華やかな夜会も、すべて日々の仕事が生み出して実を結んだものである。毎日慌ただしく細々したことをやっていたらそうなる仕組みは魔法のようだ。けれども魔法ではない。

ここもあそこもなにもかも、王宮の文官や武官の仕事によって成り立っている。

華やかな催し物のどこにどんな配慮がされているか、マリーカはその全部を知っている。だって関係各所の連携を支えているのはマリーカなのだから。文句を言い、怒りながらも仕事は進めてくれる人が大半であるし、着任したてで戸惑うマリーカを見兼ねて助けてくれる人もいた。

王都の豊穰祭なら、姉の誘いで一緒に何度か見て回ったことがあるマリーカだったが、文官になって最初の年のそれはまったく違うものに見えた。

夕暮れ時に灯る祭りの明かりの一つ一つ、当たり前前にある光と思っていたそれは人の手が入っていて、きらきらと眩しく、とても綺麗だった。

「わたし達の働きが、王家の権威や国力を民や諸国に示すことに繋がり、また王都の経済活動が盛んになれば、様々な物の産地である地方も潤う……」

正直、理不尽と忙しさで九割くらい占められているといつて過言ではない日々だけれど、仕事が一区切りつく度に味わえる充実感や達成感はその一瞬で帳消しにしてしまう。

なんだか騙されているような気もするけれど、その快感は癖になるものだ。

「無事に終われば楽しく、豊穰祭のような仕事ではこちらの大変さなんてなにも知らずに人々が楽しんでる様子も見られてうれしいものですし。答えになっていますでしょうか？」

「あ、はい！」

「では、失礼いたします」

「はっ。どうぞゆっくりお休みください」

敬礼までされてしまったが、よく考えたら身分と立場はマーリカの方が上であつたのかもしれない。文官組織の中では若輩じやくはいの小娘が上位であるのが我慢ならないと嫌厭けんえんされることも多いのに、やはり近衛騎士というのは礼儀に厚いと感心しながら、マーリカは官舎の門をくぐった。食堂で夕食をとれるまともな時間に帰れたのはかなり久しぶりだ。

（ああ、だめだこれは……）

官舎に入った途端に気が抜けて、いまにも倒れそうなほどの眠気に抗いながら自室に辿り着き、ベッドの上で力尽きたマーリカはそのまま朝まで泥のように眠った。

翌朝、特に謹慎や召喚命令なども届いていないことを確認し、マーリカはいつも通りの早朝出勤で職場へと向かう。

王族に不敬を働こうが、拘束されることもなく、命令もない以上。

仕事は待つてはくれないのである――。



オトマルク王国、王都リントン。

その日、賑わう街を見下ろす高台に立つ、王城の朝は早かった。

普段なら、王都屋敷でそろそろ朝食をとる頃なはずの大臣や長官達が一室に集まって、一人の令嬢の処遇を巡って会議を開いていた。

「マリーカ・エリーザベト・ヘンリエッテ・ルドヴィカ・レオポルディーネ・フォン・エスター＝テッヘン」

よく通る声で書類に記された名前を読み上げて、議長席に座る青年は、彼の顔の前で貴婦人の扇のように広げていた書類をテーブルに置いた。

「かわいいけど、長い名前だねえ」

それぞれ孫が何人かいような年代の高官達が揃う中、彼一人だけが若い。

窓から差し込む朝の光に輝く、淡い金色の髪の艶が美しい。彼だけ明るく照らされているかの如く、会議室に集まる者の中で一際目立っている。

「朝からこのような場に恐れ入ります。フリードリヒ殿下」

「いいよ。昨晩気が昂^{たかぶ}つちやったからか、早く目が覚めちゃって。どうしよかなあって思っていたところだったし気にしないで」

澄んだ空色の目を穏やかな微笑みと共に細めての言葉に、どう答えたものか。

青年から見て左側の席につき、この会議の進行役を任されている法務大臣は、言葉の真意をはかりかねて、ふさふさの豊かな白い巻毛を後ろに流すように己の額を撫でた。

「はあ。まあ。その、昨日のようなことがあれば……」

「昨日のようなことって？」

問われて、法務大臣は少しばかり困惑する。

我ながら要領を得ない返しをしたものだが、まるで何事もなかったかのように、きよとした顔で尋ねてくるのはどういうわけか。なにを考えているのか、あるいはなにも考えていないのか。よくわからないのはいつものことではあるものの、流石に昨日の今日で普通その様子はないと彼は思う。

（常人の普通が通用しない御方ではあるが……）

「ええと、それがあつてのこの場なわけでは？」

（この場がどういった会議の場合か、理解しているのかこの方は？）

法務大臣は胸の内ではやくつつ、細長いテーブルの向こう側に座る、内務大臣の脂あぶらの浮いた広い額が目立つ顔へと視線を送る。しかし、その視線に気がついた内務大臣は涼しい顔で目を伏せ、さっさと進めろといった意を示しただけだった。まったくこやつはすぐ面倒事を押し付けると、法務大臣はごほんと軽く咳払いした。

「昨日、殿下の執務室で起きたことです」



「ああ。うん、続けて」

「はい。では、調書によると、殿下の執務室に入室後、護衛騎士と討議中であった殿下に、待機の命を無視して詰め寄り、『なにが手土産の茶菓子に自分で選びたいだ、この無能殿下！ 貴様の考えなしの言動でどれだけの文官武官が迷惑を被^{こうむ}っていると思ってる！』と、至極正論……いえ、暴言を吐き、その上で壁際へと殿下を追い詰めたとのことですが」

「うん。台詞^{せりふ}の朗読上手いね、大臣」

「……恐縮です。更には殿下の両頬を数発ずつ平手で打ちながら、近衛騎士が取り押さえるまで、王都の豊穰祭関連の準備、視察における警備や段取りにどれ程の人員が割^さかれ、関係各所が労力を費やし、苦心を重ねているかを滔^{とう}々と語っていたと」

「うん。皆を労^{ねぎら}わないとねえ」

「ご立派なお心掛けです。マリーカ嬢の蛮行は看過できるものではありませんが」

「王子を叩いてしまっているからねえ」

緊張感のない返答。なにをどう言えはいいと、苦々しい思いで押し黙る大臣達とは対照的に、議長席に座る青年はにこにこ上機嫌な微笑みを浮かべている。

フリードリヒ・アウグスタ・フォン・オトマルク。

言わずと知れたこの国の第二王子。

深謀遠慮^{しんぼうえんりょ}を要求される文官組織を管轄し、現場を振り回す言動と、執務へのやる気のなさが評判

の、無能殿下。

（ただの無能なら、捨て置くことや完全なるお飾りとして公務から外せるものを）

とにかくこの第二王子、見た目は大変に素晴らしい。美の女神に愛されたと言っても過言ではない。涼やかで優しく賢しげな、平伏したくなる高貴さを持つ容姿をしている。

常に穏やかに泰然自若^{たいぜんじじやく}として掴みどころのない様は、金髪碧眼の美貌と相まってなにか底知れぬものを秘めていると人に思わせ、これが外交や交渉事の場において嘘のような効力を発揮する。

ただ微笑んで会話しているだけで、「腹の内では一体なにを考えている？」と相手を惑わし勝手な深読みをさせて、こちらに都合のよい誤解を与えるのだ。

（おまけにおかしなまでの引きの強さと類稀^{たぐいまれ}なる強運の持ち主……）

十八歳で公務について早々、緊張状態にあった国と会談の場で相手の勘違いと偶然が重なりあつさり状況を一転させる奇跡のような功績を上げた。

初めての地方視察では、周囲に黙って市中へ抜け出して領主の不正現場に偶然遭遇し、丁度、彼を探しにきた護衛の近衛騎士を使いお手柄といった具合に。

それらの功績は周辺諸国に瞬く間に伝わり、彼を若いが優秀で侮りがたい王族と印象付けた。

結果、警戒心からますます一挙手一投足を深読みされ、その後も大小様々な成果を上げ続け、信じられないことに、いまや〃オトマルクの腹黒王子〃、晩餐会に招かれればワインではなく条件を飲ませられる〃とまことしやかに囁かれ畏怖^{いふ}されている。

民の人氣もそこそこあり、公務から外したくても外すことができない。

しかし、フリードリヒと直接関わる者達は知っている――。

「恐れながら殿下。エスター＝テツヘン家は、我がオトマルク王国の前身から続く由緒ある伯爵家です」

「王宮とは疎遠な弱小伯爵家だね？ 資力もそうない」

「はい。しかし、その血縁を辿れば、遠く細いとはいえ周辺諸国の様々な王侯貴族と繋がります。その歴史と血筋は蔑ろにできるものではありません」

「それはすごいね。由緒正しきでいったらオトマルク家よりすごくない？」

——この殿下、本当ににも考えてはいない！

「殿下！ 滅多なことを言うものではありません！」

「えー、君たちでそういうこと言っておいてー」

「たとえ取るに足らない伯爵家でも、歴史ある家を軽んじるのは得策ではないとお伝えしたまでです」

（本当に、このうつけ具合はどうにかならないものか……）

見限って切り捨てるには功績が多い。現に直接彼と関わらない貴族の評価は高く、周囲を振り回すことも非凡であるが故と受け止められている。

（存外人たらしなところも含めて、まったくもって質の悪い）

天真爛漫で妙に人懐っこく、素直で憎めない。

臣下や目下の者に対する傲慢さのない、鷹揚な人柄はこの王子の美点である。

常識の枠から外れたところがあるがゆえの公正さは、国や王家に対する忠誠心を抱く者を絶妙な

加減でくすぐる。

（儂のように殿下の幼少期の利発さと難しさを知る者なら尚更、よき青年に育ったと子や孫を見るような気持ちも多少ある）

結局のところ、この場にいる者達はフリードリヒを支えることを選んでしまっている。

フリードリヒの無邪気さに、しばし黙考していた法務大臣を見兼ねて内務大臣はほとんどわざとらしく咳払いをした。場の注目は自然彼へと集まる。

「殿下、恐れながら一部の現場を担う文官の疲弊は深刻です。マリーカ嬢も二十五連動による心神耗弱があつた模様。それ故のあつばね……いえ、まったく遺憾な振る舞いをしてしまったよう
で」

「殿下、マリーカ嬢は貴族令嬢でありながら、平民階級の部下の信頼も厚く、高い実務能力を持った将来有望な文官。責任感の強さ故、それ故の過ち！」

「殿下、まだ二十歳を迎えたばかりの令嬢です。ここは一つ寛大さを見せ、より一層王家の為に働かせることで過ちを贖わせては」

内務大臣の言葉を皮切りに、他の大臣達は前もって決めていた通りに、口々にマリーカを擁護し、処分について進言する。

その日、王城の朝はとて早かつたのである。

フリードリヒが会議の場に現れる一時間も前から彼等は集まり、由緒ある血筋を示すような長い

名前を持つ一人の令嬢の処遇を巡って話し合っていたのだから。

その令嬢は、文官組織としては初の女性上級官吏。国王陛下と宰相が直々に審査し、王家に仕えし臣下と認められた者でもある。

「よろしく頼むと人事院に伝えたはずがどうして」

「報告内容を見る限り、意図を真逆に解釈したとしか言えんな」

頭を抱える法務大臣の豊かな白髪うぶの巻毛を若干羨ましいと思いつつながら、つるりと脂ぎった額が目立つ頭をゆるく振って、内務大臣は報告の書面を眺める。

「調整官とは……陛下任命の上級官吏が持つ裁量をこれほど活用できる部署もないが、どこからも文句を言われ、各所の間で板挟みとなる仕事など新入りに任せる職務じゃない」

「元は三名いた人員すべて他の部局兼務にするなどと露骨な……要らぬところで丁寧な仕事をおって」

「なに常套手段ではないか。後に本人が訴え出ても体制上問題ないと言えるよう書面上は人を残し、実質一人で頼る者のない環境に置く。辞めさせるのが目的であれば」

優秀な人材確保のため、新たな登用の流れを作りたい。

さらには貴族男子が中心なのは他国も同じなのに女性が数人いるかいないかの違いで、大国といっても所詮は新興、教育や思想は旧弊で遅れていると嘲笑されるのも避けたい。

他国にも縁者がいる由緒ある伯爵家でありながら、王宮とは疎遠でどの派閥にも属さず王宮勢力を左右する恐れもない貴族女性。王宮の思惑にこれ以上ない人材であったのに。

「どうしてそうなった……っ」

苦悩する法務大臣に、通達も出ていたからわかるだろうと説明を省き、後の確認をしないのが悪いと集まった面々は胸の内で呟く。丁度その頃、さる公爵令息による詐欺の情報提供を受けた第二王子に、その対処を丸投げされて大変だったにしてもだ。

前例のない貴族令嬢の文官など潰せ、と解釈しての人事院の対応。

きちんと指示していなかった以上、彼等を責めることはできない。

しかし——令嬢は優秀だった。

新任で配属などありえない部署で、実質の実務担当者は彼女一人といった仕組みられた環境で、二年も大きな問題もなく業務を遂行していたのだから。

「辞めるどころか、元は三人がかりでやっていたのを一人で回してしまうとは。そこらの令息より使える。陛下と宰相閣下が認めたのは都合の良さばかりではないということか」

顎下の短い髭を掴みながらぼつりと呟いた外務大臣に、場がにわかにざわつく。

使えぬ部下を嫌うことでは有名な男が、そのようなことを口するのは大変に珍しい。

「いくら優秀でも協力者なくしては難しい。そこそこ下の立場なら甘い顔をする者もいるだろうが、己より上位となれば女如きがと風当たりは強いはず。古参の事務官を味方につけたか？ 大抵見て見ぬ振りで動かぬ平民の彼奴等を掌握するとは、幽閉塔送りにするには惜しい。身代わりでも用意するか？」

「……勝手に幽閉にするな。あと儂に真顔で違法なことを言うな」

「冗談だ。こんなくだらん経緯と理由で処罰など馬鹿馬鹿しい」

「まあ……殿下にしたことを除けば、権限に則った令嬢の行動そのものに非はない」

外務大臣と法務大臣が險悪になりかけたのを止めるように、内務大臣は調書に記された事の経緯に触れ、法務大臣は大きいため息を吐いた。

「調整官などことも関わりがある。我々の誰も令嬢の境遇を知らずにいて、このまま処罰などと陛下にどう説明する！」

「貴殿の指示が悪いせいだろう、巻き込み事故もいいところだ」

「非は認める。だが、陛下からのお達しは貴殿らにもあつたはず。外務大臣、其方にも」

たしかに誰も関心を払っていなかったのは事実だ。正直、小娘一人に構ってられない。特にこれといった悪い話も聞かず、適当な部署で適当な仕事に従事している認識でいた。

「いっそ当事者の殿下に判断させたらどうだ？」

「うむ？」

「現場の鬱憤^{うづげん}を代弁した意味で大した令嬢だ。二十五連勤では日頃の冷静さを失っても不思議じゃない。情状酌量の余地は大いにある。感情任せに暴力はいただけだが、令嬢の平手で数発程度、無能殿下にはいい薬だ」

第二王子に辛辣な外務大臣の言葉に、外交で法務大臣と内務大臣の次に振り回されているからなと集まった面々は囁き合う。それでいて気に入ってもいる癖に、とも。

「成程。寛大な処置になるよう我々で誘導——いや、説得するということか」

はつきり言葉にした内務大臣に、おおそれはいいと一同賛成の声を上げた。

事態を穩便に処理し、使える者は一人たりとも失いたくない。

文官組織の人手不足は深刻なのである。

そのような訳で――。

いま、彼等は派閥や利権の垣根も越えて一致団結していた。

（若く、優秀で、他国との伝手にもなりそうな家の者を、貴様のせいで失つてなるものか！）

この一件の被害者たるフリードリヒの納得さえ得られたら、寛大に処すべき理由は貴族であれば屁理屈でもなんでもつけられる。

「殿下がお怒りになるのも至極ごもつともかと存じますが――」

「別に怒ってないよ」

「は？」

気を取り直し、再び場をまとめにかかった法務大臣は、不思議そうな表情でそう返したフリードリヒの言葉に、つい素の声を漏らした。

「男装の麗人って、きつとマリーカ嬢みたいなのを言うのだろうねえ。私の執務室に颯爽と現れた時の美しさには目を奪われたよ。なにより伯爵令嬢とはいえ、一介の文官の身で王族に物申しにくる勇敢さ。実に惚れ惚れする」

「はあ……」

己の頬を張り倒した令嬢のことを誉め称えだしたフリードリヒに、法務大臣だけでなく誰もが呆

氣にとられたが、彼は氣にせず語り続ける。

「だって第二王子だよ、私。進言にしたって普通は王子に説教なんてしないでしょ。でもさあ、人間叱られなくなったら終わりって、兄上もよく仰っているじゃない」

「はあ、王太子殿下が……左様で」

「聞けば、いちいちごもつともな話だったし」

「では、彼女を罰する氣は殿下にはない、と」

「暴力はよくないけど、そもそも進言に来るだけの非が私にあった。君たちときたら、こんな欠席裁判みたいな会議開いて……老害って言われちゃうよ？ 人は大事にしないと！」

（いや、元凶のお前が言うな！ そもそも我々は彼女を庇^{かば}っていた！）

大臣達は絶句し、その心の声は完全に一致する。

しかし、心の声なのでフリードリヒの耳には聞こえるはずもない。

室内は奇妙な静寂にしばしの間包まれる。どこかうっとりした響きを含む美声がその静寂を破り、内務大臣が眉を顰^{ひそ}めるまで。

「——欲しい」

「殿、下……？」

「マリーカ・エリーザベト・ヘンリエッテ・ルドヴィカ・レオポルディーネ・フォン・エスター＝
テッヘン嬢が、欲しい」

「——っ!!!」

組んだ両手に顎を乗せ、令嬢の長い名前を正確に、にこやかに呟いたフリードリヒに場は一気に騒然となった。

「いや、そんな急に申されましたもっ！」

「手続きっ、手続きというものがあるっ……」

「そもそも殿下の一存ではっ！」

「え、そんなに大変？」

当たり前でしょうっ——！

大臣達の声が、今度は人の耳に聞こえる形で重なる。

貴族の娘だからといって、王子妃になど簡単になれるわけではない。

様々な審査、様々な手続き、様々な調整が必要なことは、二十半ばを迎えても婚約者すら決まっていない、フリードリヒ自身がよくわかっているはずだ。

「えーそうなの!? 私の筆頭秘書官なのに?」

「秘書、官……?」

「うん。前任者が辞めて三ヶ月経つけど、まだ後任決まっていなかったよね?」

はああっ……と、大臣達の誰もが大きく息を吐く。気が抜けてテーブルに突っ伏した者もいた。

「ああ……その、そういうことでしたら」

「なんとかしましょう」

「ええなんとか」

口々にそう答えて大臣達は、フリードリヒが見ている前でテーブルの上に身を乗り出し、額を突き合わせるようにして相談し始める。

しかし、ひよつとすると調整官より辛い職務かもしれんぞ。

王族付はこの上ない榮譽というのに、絶対任命されたくないと言書きを聞いただけで震える者もいるらしい。

現に一年と保った者がおらんしな……無理ならどこか適当な部署に異動させればよい、ある意味処罰として妥当では？ 殿下に説教した責任を自らの働きで贖う。

大臣達は頷き合った。

「ひそひそ話し合っているけど、なんとかなりそう？」

「殿下の御心のままに」

「やった！ 愛情の反対は厳しさではなく無関心。兄上もよく仰っているよ……うふふ」

「殿下、御身が善良なお方であるのは重々承知しておりますが、くれぐれも破廉恥事案だけは起こさないでください」

「起こさないよ。これでも私は社交界で、いい人止まりなんだよ」

「それは、自慢されることではございません」

「……難しいねえ」

腕組みしてうーんと唸るフリードリヒをよそに、大臣達は彼等の思惑通りに事が運び、ほっと胸を撫で下ろしていた。

王宮の人手不足は深刻なのである。

少しばかり予想外の方に物事は進んだが、大きな問題はない。
こうして、一人の令嬢の処分は決まった。

——マリーカ・エリーザベト・ヘンリエッテ・ルドヴィカ・レオポルディーネ・フォン・エスター＝テッヘン。貴殿を第二王子付筆頭秘書官に任命する。

二 忙しすぎるので一年が早い、つらい

執務室の窓から、木々の葉が色づく庭園の風景が見える。

もうそんな季節かとマリーカは思った。

「早いものだ」

マリーカ以外に人のいない執務室で書類仕事の手は休めずに、ぼつりと彼女は呟く。

忙しすぎて季節の移ろいを気に留める余裕もあまりなかったけれど、気がつけばすっかり秋だ。

マリーカが第二王子付筆頭秘書官になって、早くも一年が過ぎたということである。

大臣達がそのことに歓喜し、高官専用食堂で祝杯を上げていたことなど知らないマリーカはため息を吐いて、確認し終えた書類を机の決まった位置に伏せた。

上着の胸元から時計を取り出し、彼女の上司であり仕えてもいる主^{あるじ}がこの部屋に戻ってくるまでの時間を確認する。

あと半時間と少しばかりといったところだ。彼女は次の書類の確認に取り掛かる。

残念ながら、マリーカには時の流れを思い感慨に浸る暇も余裕もない。

仕事に集中できるうちにできるだけ片付けておきたい。でなければマリーカの仕事は積み上がっていく一方である。

「本当につ、気儘で怠惰極まりない人のおかげで……」

一日に捌く書類だけでも大変な量なのだ。書類だけならまだしも、この時期は式典やら視察の予定も多く控えている。公務における関係各所との連絡や折衝、王家の慈善事業の一環で理事に名を連ねて支援している施設や団体への対応もある。

また社交界では意外と人望があるらしく、二十代半ばを過ぎて婚約者が決まっていないのが不思議なほど多くの貴族令嬢と交流がある。彼女達からの相談事やごく稀に王宮内や貴族の不祥事に關する情報提供などもあるらしい。

マリーカはまだその機会に遭遇してはいないけれど、過去の例で、彼女が王宮に出仕するより少し前、懇意の公爵令嬢からの情報提供を受け、その対応で大変だったと聞かされた。



「五大公爵家の内、当時序列三位な家の令息による詐欺事案なんて、王子の私に持ち込まれてもねえ。持ち込んできたのも五大公爵家筆頭の家の令嬢でさ……」

「それはまた。少々勢力闘争の気配がしますね」

「とはいえ複数の令嬢が被害にあっている、なんて言われちゃったらねえ……無視もできない。件の令息の家は先代国王の外戚で王家の信頼にも関わるし、面倒だから法務大臣に任せた」

「……大変って、ご自分ではないのですか」

大変だったのは、その対処を丸投げされた法務大臣である。

「私はね、第二王子である私でなければ絶対駄目なこと以外は、可能な限り人に任せることにしているのだよ」

「自慢気に言うことですか……」

「言うことじゃない？ だって皆、私よりよっぽど優秀で頼りになる」

多くの者を従え動かすことは王族として必要な資質ではあるものの、それとはなにか違う気がする。大体、人に任せたことはすっかり自分の手を離れたものとなる。

（これはもう、ただの怠惰だ）

五大公爵家の一つで、王家と外戚関係の家の不祥事なんて考えるだけでも頭も胃も痛くなりそうな事案だとマリーカは心底から法務大臣に同情した。

実はマリーカが文官になって早々、普通は新人が配属されない部署に配属されて激務の洗礼を受けることになった遠因でもあるのだが、そのことを彼女は知らない――。



「いつの間にか、ご令嬢方の手紙への返事を代筆するのも仕事の一つになりつつあるし……」

いまや大臣達を差し置いて、「可能な限り人に任せる」の被害筆頭になりつつあるマリーカは、ペンを持たない左手で額を押さえる。

「本当につ、この仕事量っ」

マリーカは驚くべき速さで書類に目を通し、ペンを走らせ、却下や要確認の書類にその理由を書き入れていく。却下が六割、要確認が三割、決裁に回す書類が一割といったところだ。却下や要確認の書類は部下に渡して返却。内容によりマリーカ自ら各所へ出向くことや調査することもある。マリーカが決裁するわけではないのだからと多方面から言われるが、そのように対応せざるを得ない理由があるのだ。

（そもそも殿下の仕事なのに。いいのか、こんな丸投げ!?)

マリーカが秘書官として仕えるのは、第二王子付筆頭秘書官の肩書きにある通り。

深謀遠慮を要求される文官組織を管轄する、オトマルク王国の第二王子。

フリードリヒ・アウグスタ・フォン・オトマルク。

そう。彼の考えなしの言動と執務へのやる気のなさに、振り回される立場にある文官達が、無能殿下^ぐといくら揶揄^{やゆ}しようと、文官組織の長はフリードリヒである。

ありとあらゆる重要書類、提案書や決議書あるいは国民からの嘆願書等々の行き着く先も彼のところであれば、国王陛下の名の下に決裁^{もと}を行うのも彼である。

流石に署名したり印章を押したりすることはないものの、マリーカが決裁に回していいと判断した書類を、フリードリヒはほぼ九割九分の確率で躊躇^{ためら}うことなく承認してしまう。

着任初日に書類の精査や仕分けを任せられて、いまこの状態だけれど、これでは秘書官であるマリーカが実質決裁してしまっているのも同然だった。

フリードリヒは、周囲の者に任せられることは任せる考えのようだが、いくら筆頭秘書官だか

らって、本当になにか事が起きた際に「秘書が勝手にやりました」とされたら反論できないこの状態はいくらなんでもちょっと待てと思う。

前任者が胃の不調を訴え、長期療養の末に退職したのもわかる。

「前の筆頭秘書官殿は、九ヶ月なのでよく保った方ですけどね」

いまの内に隣室の秘書官詰所にいる部下の主任秘書官を呼び出し、確認済みの書類を渡しなが
らマリーカがこぼせば、そんな言葉が返ってきた。

オールバックに整えた栗色の髪と眼鏡が特徴的な、カミル・バッヘムという名の中級官吏の彼は、
フリードリヒが公務に就いた年に十九歳で登用されて以来、ずっと第二王子付秘書官でいる一番の
古株である。

上司となる筆頭秘書官の入れ替わりが激しいためか、八年勤め、業務に精通しているのに昇進機
会を与えられずにいた。マリーカが推薦し、この春から主任秘書官となっている。

「エスター・テッヘン筆頭秘書官殿が最長記録更新中で、お偉方はさぞ喜んでるか」と

マリーカには彼を含め、直属の部下が五人いる。

「却下は王宮内配達でいいですね？　いつもながらご丁寧な却下事由つけてくださってますから。
あとはこっちで適当に割り振りますよ」

「お願いします」

若干嫌味っぽい口調は仕方ない。マリーカというより、着任してはすぐ去っていく筆頭秘書官な
ど信用できないだろうし、まともな体制ではない状態が長く続いてもいる。

彼の他は、平民登用の下級事務官の女性が二名、上級事務官の男性が一名、囑託雇用の元王宮侍従職の儀礼監修役の初老男性が一名。事務官は官吏ではない。侍従職は王宮使用人であるから、官吏の秘書官はカミル一人だけである。

いくら人手不足だからって、第二王子の秘書官の構成ではない。

王族の補佐である、普通は側近の貴族や上級官吏や中級官吏が複数いるものだ。王太子殿下はもちろん、最近公務に入り始めた第三王子もそのはず。

フリードリヒには、彼に仕事を丸投げされて動く、大臣他高官が複数いるから特殊な扱いになっているのかもしれない。だからといって日常の種々雑多な業務は秘書官なしには回らないというのに、この体制。マリーカが着任前の約三ヶ月間、指示判断をする監督者である筆頭秘書官も空席だったのだから破綻している。

増員要請は出しているが人事院からの回答はない。

（王族付になるくらいの上級官吏が過去何人も辞めていて、人事院からしたらこの人手不足にふざけるなだろうけど）

「豊穰祭関連の調整もまだ続いています」

「昨年より全然マシです。まだ諦め悪く官吏の増員考えてます？　いくら筆頭秘書官殿が鉄の精神の持ち主でも、ここでそんな希望もってちゃすぐ病みますよ」

（……信頼回復が第一だろうなあ、やっぱり）

彼等からしたら上司としてのマリーカの第一印象は最悪だろう。

昨年、視察ルートの変更に対しての異議申し立てをした相手だ。破綻した体制の中で行う仕事に文句をつけられ、なにも知らないくせにと思ったはず。おまけにあの時は、指示判断を行う筆頭秘書官が空席だった。むしろよくやれていたと思う。主任秘書官は皮肉屋だが任せたことはしつかりこなす優秀な官吏で、彼の指示で動く事務官達も鍛えられている。

下級事務官は、読み書き計算の義務教育だけの平民登用枠のはずが、カミルの指導の賜物たまものか書類の清書も、資料調査もある程度できる。上級事務官は下級官吏も同然の働きをし、儀礼監修役も元王家に仕えた侍従。典札知識は流石で気働きがある人だ。彼等を守らねばと思う。

「出来る限り、健全な労働環境の維持に努めるのはわたしの責務です」

「去年よりマシって言ったの聞いてます？ 殿下のやかしも邪魔も、各所からの苦情も、近頃は最小限。あとはその行き過ぎた仕事量さえご調整いただければ」

マリーカの机に積まれた書類へ半眼を向けたカミルに、彼女は申し訳なさを覚える。

出来る限り彼等の負荷を減らす形で渡していても、物理的な量はいかんともし難い。

「そうですね、善処しましょう」

「善処？ 筆頭秘書官殿が被かつても意味ないと思いますがね。こんな馬鹿丁寧ていねいに書類見てた人は過去いませんし、人が替わったら元に戻るだけでは」

「……っ」

下がっていいかと尋ねられて、マリーカは頷き、再び一人きりになった執務室でため息を吐く。痛いところを突かれてしまった。

「正論……というより、試されたかな」

きつと根本的になんとかしろということだ。

「やっぱり根気強く、人員補充をお願いするしかないか」

しかしもう一年が経つのに、一向に部下との距離感が縮まらない。

（若輩の貴族女性の上司なんて、部下からしたら扱いにくいのはわかるけど。もうちょっとこう、友好的な関係を築きたいのに……わたしが愛想がないばかりにっ）

黒髪黒目の涼やかに整った顔立ちのマリーカは、動揺など人に見せない十五歳までの淑女教育と元々社交も苦手なために、彼女の内心はともかく他者からは冷徹な美女に見える。

それは彼女自身、愛想がないと若干引け目を感じている部分でもあった。

「殿下ほど突き抜けたくはないけれど、あの天真爛漫さは少し羨ましい……っ」

首を左右に振って悶えながら、マリーカが仕事の続きに勤しんでいた頃。

隣室の秘書官詰所では、戻るなり「あああっ」と後悔の声を上げた主任秘書官が同僚達から呆れられていた。

「俺はまたっ、あの人に意地の悪いことをっ」

「またですかあ。我らが女神をいじめないでくださいよーもー。辞めたらどうすんです」

「折角、定刻勤務で終われるようになりましたののう」

「マリーカ様が美人すぎるからって、カミルさん、ほんっと不器用」

「気を遣わずに仕事投げろって普通に言えばいいのに。そんなだから奥さんに唐変木ちへんぼくって言われる

のよ。ていうかカミルさんだけマリーカ様と話すの羨ましすぎるんですけど」

「うるさいっ。お前らさっさとこの書類、配達所と各所に配ってこいっ。あと王族執務室なんて、八年ここにいて俺でも気が引ける場所だぞっ」

マリーカが考えるよりずっと、十分、距離は縮まっているのだが、互いに遠慮している主任秘書官と筆頭秘書官の間でそれがいまひとつ伝わっていないのは、一種の悲劇でもあり喜劇でもあった。「……今日は官舎に戻れるだろうか」

フリードリヒの決裁に回す書類を横目にマリーカはぼつりと呟いた。今日は若干案件数が多い。却下や差し戻しが少ないのは、それだけ文官組織の仕事が^{はかど}捗ることに繋がるから喜ばしいことではあるけれど、フリードリヒが判断してくれなければ意味がない。

フリードリヒに彼の仕事をさせる。

これがマリーカにとって最も骨の折れる仕事であり、第二王子付筆頭秘書官の最重要任務であった。

「調整官だった頃も、繁忙期以外は自室で眠れる時間には帰れたのにつ」

時期によつては二、三日休暇を取ることも、社交期間が終わった冬期は帰省もできた。

「それがいまや……くうっ」

夜には休むし、休日もあるにはあるけれど、予測がつかない彼の言動のために頻繁に激務の嵐がやってくるため、マリーカの勤務は非常に不規則である。

「護衛の近衛騎士が四六時中側にいるのに、すぐ逃げるし……」

フリードリヒには近衛騎士達も手を焼いている。一瞬の隙を突いてすぐふらっと王宮のどこかへ消えて、時に王城の外へもお忍びともいえない大胆さで抜け出して執務をさぼる。その度に彼を探すことになり、おかげでかつて第二王子に危害を加えた現行犯としてマリーカを拘束したフリードリヒの護衛の近衛騎士達と、この一年で固い連帯の絆を結んだ彼女であった。

「やっぱり一度シメる……泣かすっ……」

引つ掛かりのない上等な紙の書類にさらさらとペンを走らせながら、口をついて出るのはフリードリヒに向けた文句である。大体、〃無能殿下〃なんて呼ばれているくせに、執務でなければ、マリーカを驚嘆させる能力を時折見せるのが本当に業腹である。

どうやら複雑な王宮の通路や建物の構造、守衛や警護の騎士の配置や巡回もすべて頭に入っているようだ。でなければ王子がふらっと抜け出すなんて不可能である。

そんなことを考えながら、出席した会議の議事録に署名して、ふと、マリーカはペンを動かす手を止めた。王族付ということで近頃無駄に長い高官達の会議に呼ばれることも増えている。

「ああいや、一度シメてはいるのか……」

まさに一年前の出来事を思い出して、マリーカが顔を顰めた丁度その時だった。

「ただいまー。今日も殺気だっているねえ、マリーカ」

「殿下、お戻りですか」

失礼な挨拶と共に執務室に現れた人物に、彼女は椅子から立ち上がって一礼する。

ノックも前触れもなく許されるのは、この部屋の主であるからだ。

（ああ、仕事に集中できる時間よ。終了——）

「でもさー、どうして一緒に来てくれないの？」

「でもさーの脈絡がありません。まったくもって意味不明です」

「父上や母上、兄夫婦や弟妹達との昼食会」

「むしろ王族一家団欒だんらんの場に、何故わたしが同席できるとお思いか」

執務に戻ってよしと、軽く右手を持ち上げて下げる合図をしたフリードリヒに従い、マリーカは自分の席に座る。この席も、マリーカにとっては不本意なものだ。

王族の執務室は王族のためのもの。その側に立って控えることはあっても、臣下として仕える身であるマリーカの席がそこに設置されるなどありえない。

部下達は当然、隣室の秘書官の詰所に控えて仕事をしている。

しかしフリードリヒの強い要望で、マリーカの席だけが彼の執務室にある。

いくら隣室につながるドアがあっても、第二王子の執務室にマリーカの部下達が気軽に入れるわけがない。マリーカが隣室に行くか、フリードリヒに断って主任秘書官のカミルを呼び出すかだ。

非効率極まりない。

「マリーカ」

「はい」

つい、じとっとフリードリヒを上目遣いに睨んでしまった、マリーカの頭の上から降ってきた美声に彼女は返事をした。

「今日はまだなにもしていないのに、どうしてこの無能」って目で見てくるのさ！」

「なにもしていないのが問題だとは思いませんか」

つん、とそっけない調子で、書類へ再び目を落として仕事の続きをしながらマリーカはフリードリヒに答える。王族に対する不敬だなんだというものは、護衛の近衛騎士を除く第三者がいない時に限り、いまやこの主従二人の間では無いに等しいものとなっている。

「理不尽」

「そう思うのなら、仕事をしてください。書類が溜まっております」

「――マリーカ」

とん、と小さくも圧力をもった音を立てて。

マリーカがペンを走らせていた書類の角をフリードリヒの指先が押さえた。

甲を見せる形のよい大きな手に内心むっとしながら、しかしその顔は無表情のままマリーカは書類から頭を持ち上げて彼を仰ぎ見る。立って彼女の机に手をつき、机に寄りかかるように体を斜めに傾けて、マリーカを見下ろすフリードリヒの眼差しがわずかに細まった。

（まったく。腹立つまでに……顔がいい）

二十六歳の第二王子は、夢見る少女が憧れの貴公子を思い描いたなら、おそらくこうなるといった姿をしている。白い絹に金の刺繍を施した衣服がこれほど似合う人もいない。

誠実さを感じさせる凛々しい眼差し、その瞳はどこまでも澄んだ空色。

短めに整えた、柔らかな光を放つ波打つ金髪。



育ちの良さを思わせるしみひとつなく滑らかな象牙色の肌は、疲労と寝不足で肌荒れ気味なマリカにとって大変羨ましい。

品よく収まり高貴さを示す、通った鼻筋や引き締まった口元。

ごく薄く薔薇色が差す頬に長いまつ毛が物憂げな影を落としている。

黙っていれば、彼を深く知らない諸外国の使者を畏怖させる、深遠な考えを持つ第二王子そのものであるが、もちろんそんなわけがない。

（全世界に真実を知らしめてやりたいっ！）

筆頭秘書官としてフリードリヒに付き従い、その公務の場に控えることも多いマールカは時折そんな衝動に駆られるが、国益を考えればできるはずもない。

「私の書類はすべて、愛情込めて君が目を通してくれるのだろうか？」

すらりと長い手足。細身だが貧相ではない体つき。

全体的に柔和で穏やかな人好きのする雰囲気で、^{リント}王都っ子を選ぶ、会ってお話してみたい王族番付四位[〃]に入るくらいには、そこそこに民の人気もある。

「公正かつ慎重に精査いたしますが、決裁は殿下のお仕事です。あと顔が近い！ 破廉恥事案！」

「えー！」

「わたしで遊ぶ暇があるのなら、ちゃっちゃと書類を片付けてください」

「もう私の筆跡だってお手のものじゃないか！」

「殿下がご令嬢方への手紙の返事を滞らせるからでしょう！ 手紙の代筆はしても公文書偽造は致

しません」

「私の顔に免じて」

「顔でなんでも許されると思うな！」

大変に美形であることは認めるが、それに惑わされて犯罪者になるつもりはない。

（王族としての資質は悪くない人なのに）

本当に見た目は申し分なく、温厚な人柄。平手でその頬を往復で叩いたマリーカを不問にし、おまけにそんな彼女に少々親しみあり過ぎる気もするけれど、何事もなかったように接してくれる懐の深さもある王子である。

これで怠惰でさえなければ——実に残念だとマリーカは嘆息する。

「ため息なんて吐いて、幸せが逃げちゃうよ？」

「殿下に捕まった時点で、すべての幸いから見放されております」

（わたしのこの一年にあるはずだった余暇を返せ。今日こそ官舎の自室に帰りたい）

「マリーカ、酷い」

「仕事しろ。仕事しないなら人の邪魔をせず大人しく座っていろ！」

王族だからといった遠慮は、わずかひと月の内に無しとしたマリーカだった。

でなければ仕事が進まない。気に食わないなら縛り首にでもなんでもすればいいと、半ば自棄^{やけ}になつてのことだったけれど、咎^{とが}められることもなくいまに至る。

（この点に関しては、「人間叱られなくなったら終わり」なんて言つて、殿下が寛大なのに甘えて

いる気もしないではないけれど」

「まったく王子の私に対して厳しいのだから。ああ、でもそれが私の人生に新鮮な刺激を与えて――」

「寝言は寝てから仰ってください」

胸元を手で押さえて天井を仰ぐ芝居がかった動きで、美声を張り上げたフリードリヒの言葉をこれ以上ないほど淡々と冷たくマリーカは遮った。

王族に危害を加えた大罪人として幽閉塔に送られるか、首を落とされてもおかしくないはずのことをしたマリーカを不問に付した上、筆頭秘書官として取り立ててくれたのは有り難いと思ってる。

しかし、マリーカとしては人生の汚点でしかない出来事を、時折まるで素晴らしき出会いの如く、芝居がかった調子で話すのは止めてほしい。

悪意はなさそうだが、どう考えても嫌がらせである。

マリーカが机の上に分けていた、決裁送り、の書類をうんしょと抱えて、フリードリヒは彼の執務机に向かった。

「真面目にやるから、全部終わらせたらご褒美が欲しい」

「そもそも全部終わらせて当然な、殿下のお仕事です」

「私 গতামানে日課を真面目にやると、母上が頭を撫でて頬にキスしてくれたものだよ」

「おいくつの頃の話ですか。秘書官に、よくできましたー、なんてされたいんですか？ まった

く……そういえば、東の島国にキスと呼ばれる白身魚があるとか」

「なにそれ？」

「薄い衣をつけたサクサクの揚げ物が美味だそうですよ」

「そんなことを聞いたら、食べたくならないか！」

「かろうじて我が国でも入手可能なようですから、きちんと終わらせたら侍従長にお伝えし手配しましょう」

（深く考えずに言っているのはわかるけど、法務大臣に破廉恥^{セッハ}事案として報告しよう……疲れる）

文官達が言うほど無能な人ではない。

秘書官として彼の側に仕える前から、マリーカはそう思っていた。

調整官だった頃、彼の気まぐれには色々と苦勞させられたけれど、彼の要望は無茶であっても無理ではなかった。調整がつかない点では、大臣他高官達やその奥方^{わがまま}の我儘の方が実は厄介で無理難題だったりする。

視察ルートや行き先の変更が入っても、警護や安全確保が難しい場所だったことは一度もない。王城の外などろくに知らない、常に馬車で安全な場所にしか足を地に下ろさない人はずなのに、と書面上ならいっしょか気に掛かるようになった。調整にかかる手間や日数に対する概念がないとは思えないのが、誰よりも迷惑だったこともあるけれど。

この点、いまはマリーカが気をつけているから、随分とましになっているはずである。そうだと
思いたい。

現場の文官が振り回されるのは、フリードリヒ一人の問題でもない。

彼を内心侮り内容を誤魔化した書類を出す者、通常の手続きを通さない形で妙な動きをしている案件もある。そういったものは後で大抵面倒事を引き起こす。

（普段ろくに書類を見ない人なのに、そういったのには妙に勘が働くし）

強運の持ち主と言われている所以^{ゆえん}かもしれないけれど、やる気が出ないとか気が進まないとか言って、まるで相手の出方を見るようにぐずぐずと後回しにする。

着任初日がまさにそれだった。



「なんですか、これはっ！ どうしてこんな日数の過ぎた書類を大量に！」

見事な木彫り細工が施された厚い扉。白と金で彩られた壁に、深い青の絨毯、王家の権威を示す如く紋章を掲げる柱。一目で一級品とわかる風格を漂わせている調度類。

室内のなにかもが王族の威厳を示すような執務室の様子に圧倒されながら、これ以上なく気まぐずい着任挨拶もそこそこに、美しい館色のフリードリヒの執務机に乱雑に積まれている書類が気になって、その大量の書類はなんですかとマリーカは彼に尋ねた。

言葉を濁して誤魔化そうとするフリードリヒに、彼の秘書官を拝命した以上はとやや強引に確認すれば、日数の過ぎた書類の多さにマリーカは軽く目眩^{めまい}を覚えた。

遅れた仕事の割を食うのは現場の文官達である。

着任早々、またもフリードリヒに詰め寄ってしまったマーリカにぼそりと彼は答えた。

「どうにも気乗りしない」

「は？」

「それに本当に決裁が必要なら、確認しにくるものではないかな。それもないうてことは別に放置しても特段支障はないってことでは？」

「そんな理屈がありますかっ」

「でもねえ、これが結構そうだったりするのだよねえ」

あげく筆頭秘書官がいない間になんでもかんでも持つて来られてもなどと言いつ出したフリードリヒに、では精査して仕分ければ見てくださいかとマーリカが返せば、できるのならそうしてほしいねとのたまう彼にかちんときた。

「殿下、エスター＝テッヘン殿はいま着任したばかり……」

「問題ありません。着任した以上、殿下の補佐がわたしの仕事です」

間に入ろうとしたフリードリヒ付の護衛、マーリカを取り調べた赤髪の近衛騎士は額を押さえたが、構わずマーリカは黙って書類の精査に取り掛かった。すると驚いたことに、マーリカが見てもこれはいささか杜撰ずさんが過ぎるもののが大半だった。

「そんな……」

「ね、結構当たるのだよ、私の勘は」

書類の束を腕に抱えて呆然とするマーリカに、フリードリヒはそう言つて肩をすくめた。

「勘や気分です事をされては、現場の文官が困ります。第一、それなら然るべき……」

「冗談だよ。そろそろ内務大臣に渡して処理してもらうかなとは考えてた」

それもどうかと思うとマーリカが困惑していたら、隣室からなにやら言い争うような声が聞こえ、執務室の扉を叩く音がして赤髪の騎士が動いた。

廊下から、急ぎ取り次ぎを乞うやりとりが漏れ聞こえてくる。

「どうした。アンハルト」

「殿下に急ぎ、お目通りをと」

着任挨拶でも紹介されないままだった、赤髪の騎士の名はアンハルトというらしい。

マーリカを気遣うように見た彼に、このままここにいていいものかと彼女は思ったが、どうすべきか迷っている内にフリードリヒが入室の許可を出す。

特に外せと言われてもない。いかにもどこかの部局の長らしい身なりをした中年男性がフリードリヒの前まで来て、その場を離れる機会を失ったマーリカは仕方なく秘書官として不自然ではないよう姿勢を正し、その場に大人しく控えることにする。

男が名乗り、それを聞いてマーリカはあれと思う。

さつき確認したばかりの書類の中で見た覚えがある名だ。彼女は腕に抱えた書類の心当たりのある箇所へ指を差し入れた。マーリカが動いて書類を触ったからだろうか、ちらりとフリードリヒが彼女を見たが、すぐにのんびりした様子で男へ視線を戻す。